
怪盗黒狼たんと保険女

シンシンノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗黒狼たんと保険女

【Nコード】

N4227BA

【作者名】

シンシンノ

【あらすじ】

とある怪盗とそれを追う保険会社勤務の女性の話。

気分転換に書いたものです。ちょこちょこ合間に書いてまとめて投稿するために更新は遅くなると思います。

プロローグ（前書き）

開いていただきましてありがとうございます。

プロローグ

の話は、西暦20XX年の現代に蘇った『怪盗ブラックウルフ』。
予告状を出し警察をあざ笑うかのように不思議な力を使いながら犯
行行つ彼。

彼の正体とは？犯行を繰り返す彼の目的とは？未だその答えは闇の
ベールに包まれている。

そんな彼を追いかける保険屋の女とその相棒でどこが抜けたところ
のある少年の物語が今始まる。

.....

『予告状』

明日午前0時に展示されている、

絵画〈聖母の微笑み〉をいただきに参ります。

ブラックウルフ

.....

聖母の微笑み 前

月8日 PM 11:50 サルフス美術館

美術館の入口近くに急遽作られた仮設テント中にモニターやら無線機などいろいろな機材が置かれている。

そのテントの中では10名程の警察服を着た男女が忙しく動き回っている。

そんな中動き回る人の中で一人、テントの中央から動くことなく時計と手に持ったレポート用紙を交互に見ていた男がふいに一言発した。

落ち着いた声のトーン。それでも凄みを感じるような声色。

「時間が近づいてきているな。やつがそろそろ現れるはずだ。全員警戒を強める！！蟻の子一匹とおすんじゃねいぞ！！わかってると思うが、美術館内では様々な防犯システムが作動している。お前たちは外の警備をしつかり行え！！！」

薄い茶色のスラックスに白いシャツとネクタイその上にベージュのコートを羽織った男が周りにいる部下たちには激を飛ばす。

歳の頃は40代後半くらいだろうか？程良くらいに恰幅がよく、若干白髪が交じり始めた頭をオールバックでまとめている。

(ブラックウルフ：今日こそはその面を拝んでやるからな…)
思わず力が入り、手に持っていたレポート用紙が『グシャッ』と音を立ててつぶれる。

男は手の中でつぶれたレポート用紙の束を一瞥すると苦々しい顔を

してそのままゴミ箱に投げ込む。

（表紙だけ『関係者以外閲覧禁止』なんて大層なことがかかっているが、中身は長々書かれているが、なんてことねえ、つまりはなんにも解かってねえって事だろうよ…）

男は懐からタバコを取り出すと火をつける。

そこへひと組みの男女が近づいてくる。片方は細身の男の方でスーツ姿の出で立ちをしておりスーツケースを引きずっている。女の方はなぜかスカートタイプのスーツ姿の上に白衣を重ねている。二人の左の袖にはそれぞれ緑色の腕章が付けられていた。

そんな二人はタバコを吸っている男の近くに手をに振りながら歩いて寄つてくると、女はダルそうに振っていた手を止めると話しかけてくる。

「岩本警部久しぶり。あんまりタバコを吸いすぎると体に良くないよお？それで警備の方はどんな感じ？」

女は二回り以上ある年の差を全く気にせず馴れ馴れしく話しかけてきた。

連れの男の方も、

「警部さんおひさしぶりっす。今日はよろしくお願いするっす。」

敬語なのか敬語じゃないのかよくわからないような口調で挨拶をすると浅いおじぎをする。

そんな二人を一瞥すると岩本警部と呼ばれた男は苦虫を噛みしめたような顔をして、

「またてめえらかよ……こっちは忙しいんだ。保険屋は大人しく車の保険でも売ってやがれ。ここは素人がうるついていい場所じゃねえんだよ。」

そういつて二人を追い払おうとする。

「私としてもね、ゆつくりカップ麺を食べたいところだったんだけど、誰かさんたちが『銀狼』たんにいいようにやられるから。うちとしても保険を掛けられたものが、狙われている以上黙っているわけにはいかないの。っというわけでこれが入場証ね。」

そういつと自分の左の腕を指さす。

「検察庁の許可はもらってるからこっちはこっちで好きなようにやらせてもらうよ。」

そういつて女は歩いてどこかに行ってしまう。

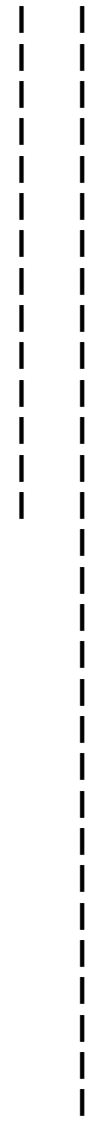
「ああ先輩待つてくださいいっす。警部さん自分も失礼するっす。」

スーツ姿の男のほうも女のあとを追う。

残された警部と呼ばれた男は吸っていたタバコを足で踏み潰し、近くいた部下の1人に

「あの二人の事は放っておけ。相手にするだけ無駄だ。」

そう言い残すと辺を見回りに出ていくのであった。



関係者以外閲覧禁

ブラックウルフに関する報告書（一部抜粋）

1・本年4月1日～10月10日現在で過去判明している限りで、5件程の犯行が行われている。

なお判明していない事件もあるとみられる。

2・被害金額はは判明してる限りでもつとも市場価値にして安い物が数百万、もつとも高い物で数千万、被害総額が累計で1億円を超すといわれている。

補足として今回犯行予告の対象となっている『聖母の微笑み』は少なくとも1000万以上の市場価値がある。

金額はあくまでも市場価値であり、歴史的価値など付加価値をつける金額は数倍に跳ね上がると思われる。

3・ブラックウルフは犯行の前に必ずといっていいほど、犯行予告を行っている。過去10件全て『予告状』形式で行われている。

なお予告状に関しては郵送で届けられたり、犯行予告現場に貼り付けられたりしているが消印もバラバラになっていて、現場に

貼り付けられている場合も付近の防犯カメラにはあやしい人物の姿は映っていない。

予告状自体もどこにでも売っているような紙を加工して作られており、予告状から犯人にたどり着くことは難しいと思われる。

4・警備していてブラックウルフに遭遇した者の証言によると、身長は170〜180、やせ形。全身黒の服で顔には額の辺りから鼻を隠すようなオペラで使われるような仮面が付けられている。

5・空を自在に飛び回る。（原理は不明）他にもなにか特殊な現象が確認されている。

被害にあつた物のリスト（犯行順）

? 4/11 ティアラ（純金のティアラにルビーをあしらったもの。）メルス博物館

別名火のティアラ。

? 4/28 王冠（純金の王冠の中央にブラックダイヤモンド）

ア）綾小路宅（資産家）

? 5/30 フランス人形（アンティークフランス人形。目の部分にエメラルドを使用）

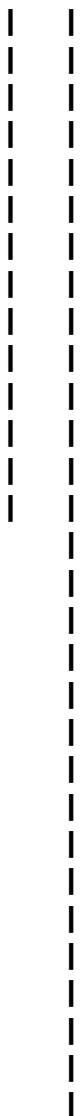
佐伯邸（個人収集家）

? 7/1 ブローチ（有名な歌姫が付けていたブローチ
アメジストで装飾）

佐々木望記念館

? 8 / 19 絵画 (ムーレ作 有名絵画。額にアクアマリ
ンの装飾)

テンバール国際博物館



回想

10月8日PM12:00 京橋区に『プラン総合保険』の一室。

分厚いファイルの並ぶ本棚に囲われた部屋ドアには『特別事件保険科』つという張り紙がしてある。

20歳前後と思われる白衣姿の女がのんびりとカップラーメンを食べているところに彼の部下で今年の春に新しく配属されてきた男が息を荒げて慌ただしく飛び込んできた。

カップラーメンを食べていた女の名はく黒城 暦>中身が残念で変わり者として社内でも有名な女である。

そのくせ彼女は、頭はよく顔も麗しく、スタイルもモデル並みにいいといから始末におけない。

「クロウ君そんなに慌ててどうしたの？私の大事なカップ麺に埃が入ってしまうじゃない。」

暦は左手にもったカップラーメンと右手に持った箸を一旦テーブルに置き、カップラーメンの湯気で曇っていたレンズを拭きながら走りこんできた部下に訪ねる。

「先輩のんきにカップラーメンなんて食べてる場合じゃないですよ！」

その一言に暦は顔をゆがませる。

クロウはその暦の表情に気がつき「やべえ」と思ったがもう遅い。

「『カップラーメンなんて』クロウ君はいまそう言ったね？ただで

さえ私が神聖なるカップ麺を食べているのを邪魔しておきながら、あまつさえ『カップラーメンなんて』だって？君はカップ麺の素晴らしさをまだ理解してないというのかな？この間のく猿でもわかるカップ麺の素晴らしさ 1号君>を使った特別授業では君に難しかったんだね・・・。しょうがない今度はくクロウ君『ですら』わかるカップ麺の素晴らしさ1号君>の出番のようだ・・・」

「いやまってくださいよ！？僕』ですら』で猿以下に扱いたくないでほしっす…」

それにいまのはたまたまです。言葉の綾ってやつっすよ！？
カップ麺の素晴らしさは僕も完全に理解させていただきまっすっす。

だから頭に変な機会をつけなくてくださいっすううう！！！？

あ・・・頭に変な映像と音楽がながれてくるうううう！！いやああやめてこないで！？麺が・・・麺が襲ってくるう…」

クロウはなにかを思い出したように血の気の引いた青い顔をしながら部屋の隅で小さくなりぶるぶる震えさせる。

そんな彼の様子を3分くらい見ながらカップラーメンを食べつつけてた後、少し気が晴れたのか最後のカップラーメンの汁を飲みほし曆が落ち着きを取り戻しつつあるクロウに尋ねる。

「ところでクロウ君なにが『また』なの？もしかして『また』女性職員に告白でもして振られたかな？そういえば総務課の薫子君に最近ちょっとかいをだしているらしいじゃない。君も本当に懲りない男だよな。香子君は署内の童顔で可愛い顔・愛くるしい性格で社内アイドル的存在。そんな薫子君が百合の花だとすればハルト君は空き地に咲くクローバーつまり雑草だね。薫子君は高根の花で無謀もいいところだと思っよ？悪い事は言わないから諦めたほうがいいよ？」

「

「な！？先輩どこでその話を！？っていうか、そ・・そんなんじやないっす。」

薫子さんはたしかに素晴らしい女性で出来ることならお近づきになりたいとは思っているっすけど、

なにぶん本人より周りのガードが固くて全然近づけないっすよ…。」

若干落ち込みながらクロウがボヤク。

ちなみにクロウはここ4ヶ月ですでに2人の女性に振られている。

しかしクロウが全て悪いかと言えばそうではなく…。一番の原因は他にあるというのはまた別の話。

「まあクロウ君も顔はそれなりでまだまだ若いんだからこれからチャンスはあるさ。若人よ大志抱きたまえ。」

暦は右手をシャキーンと伸ばし箸を突き立てるようなポーズをする。

「いやいやいやさつきと言ってることが全然逆っす！？それに若人って先輩の方が入社が早いだけで僕のほうが何度もいってますが僕は今年で24で年上っすからね…」

そうクロウは大学を卒業後この会社に入社して研修期間が終わった6月にこの部署に配属された。

その時には暦は既にこの部署にいたので、少なくとも今年度入社ではないはずである。

後から聞いた話によるとこの部署が出来たのはクロウが配属される1か月前だったようで、なぜか部署のメンバーは暦とクロウだけである。

(まあこの先輩には何言っても無駄なんすよね…ハア…)
クロウは諦めたようなため息を付く。

「って違うっす！？そんな話をしにきたんじゃないんすよ！？予告場が届いたんっす。ブラックウルフからの！！？」

ブラックウルフという名前を聞いた瞬間曆の目が光る。

獲物を狙うチーターの目のように。

クリスマスの夜にプレゼントを楽しみにする少年の目のように。

そして憧れの彼を見つけた少女の目のように。

「ほう黒狼タンからの予告状ねえ〜なんでそれはもつとはやくいつてくれなかったの？もつたいぶつたのかな？」

私たちの仕事は銀狼さんの被害に関する保障をしているって事を忘れたのかな？それで今回こそは本物なのかな？」

ニヤリと笑いながら曆がクロウに迫っていく

その迫力に押されるようにクロウは両手を振りながら後ろに下がる。

「いやいやいや待ってっ下さいっす。冤罪っす。！！先輩が話を聞いてくれなかったんじゃないっすか！？僕は最初に言おうとし「まあそれに関しては置いといて後で聞くとして、なんて書いてあったの？」

クロウ言葉を遮るように続きをを促す。

「いや置いとかないで今聞いて欲しいんっすけど…ヒヤア！？すいません言います。言いますから。そんなに睨まないで欲しいっす…

ブラックウルフからの予告状の内容はこれっす。」

そういうとクロウは慌てながら懐から取り出した紙を一枚曆に渡す。白くノートの半分くらいのサイズの紙を・・・ありていに言えば普通のA5の用紙だった。

「その紙はブラックウルフの予告状をコピーしたものつす。朝、美術館の職員が玄関先に貼られているのを発見したらしいつす。」

渡された紙をまじまじと見つめる曆

「それでさつきも聞いたけど、この予告状は本物なの？最近、模倣犯やいたずら目的で影琅たんを騙った虚偽の予告状が多いんだけど・・・」

そういうと曆はクロウをジロリと睨む。

「こ・・・今回に関しては少なくとも警察の方じゃ本物として警戒を始めてるようつすね。ぼ・・・僕も馬鹿じゃないつすから少しは調べてから先輩に渡すようにしたつす。そんなに疑うなら先輩も自分で調べてみるといいつす。」

「んゝそうなんだけど。すでに本物つて確証があるなら無駄なことはいしたくないじゃん。それに・・・」

「本物だろうが、偽物だろうが、めんどくさがろうが、仕事な以上放置はできないだよゝ。それが社畜というものなのだよ...。偽物だとわかっていても上からの命令には逆らえないのさ。」

そういうと彼女はどこか遠くを眺めていた。

ここ半年くらい前から『ブラックウルフ』と名乗る怪盗による窃盗事件が相次いでいた。

ブラックウルフに関しては情報がまだ少なく、わかっていることと言えば、名前と犯行前に予告状を出すというくらいである。

そう彼女たちの仕事はブラックウルフが活発に活動ははじめてから被害を恐れた持ち主などに対して保険を掛けてもらい、保険対象がブラックウルフの被害にあった場合保障するというものなのだ。

業務内容の中には本当にブラックウルフの犯行かの見極めから、できる限り被害を抑える。というものまで多岐にわたるのだった。

そしてその中には、ブラックウルフの犯行の分析をするために保険の掛っていないものでも現場を赴くことも多々ある。もちろんその場合もしブラックウルフの犯行であっても

保険金は保障されないのだが。

そして模倣犯などの快楽犯の予告状などにも念のために対応しなければならぬのだ。

~~~~~

ケース1

9 / 16

「先輩こいつつす！こいつが今回予告のあったブラックウルフの獲物つす。」

「・・・本当にこれが黒狼たんの獲物だというの・・・？警察の姿も全く見えないし、それがすごいものには思えないんだけど・・・」



「少なくともこの予告状にはそう書いてありますっす。それに警察には連絡はいつてないらっす。なんか理由があるらしいんですけど……」

そういつと自信満々に予告状と思われる紙ともふもふとして物体を掲げるクロウ。

.....

『予告状』

9ノ16に3丁目 岡本さんの家に飼われているタマの首輪を、  
いだだきに参ります。

ブラックウルフ

.....

「にゃー……」

クロウ腕から飛び出て逃げるタマ。

「ああ待っつす!!君は危険なんっすよ!?!」

「……………クロウ君私もこんなことは言いたくな



「はい！先輩！あれっす！！」

そういつてある人物を指差す。その指先には・・・

購買部のパンがあつた・・・

-----  
-----  
~~~~予告状~~~~

国立 東洋化学大学で大人気の限定焼きそばパンを頂き
に参ります。

ブラックウ

ルフ

「.....」

暦が言葉を無くしていると...その目の前では・・・

「もぐもぐもぐ、せんは〜いこれさぶがよ〜くされるだけあるっす
よ。めっぶあ〜くちやっす味いっぶ。」

ミ予告状だひょん

§ §

みなハ はハ ユ っつといたた"いちやうた"ひ
およ (〓^・^〓)

クウサビョウ

ヒョウ

そこにはよくわからない文字が並んでいた。
さすがに暦も戸惑いながらクロウに尋ねる。

「・・・なにこれ？暗号？」

「なんか調べた結果・・・ギャル文字みたいっすね。ちなみにこっ
ちが解読したものです。」

ミ予告状だぴょん

みんなのハートはバキューンっといただいちゃうだぴょん)
§ §
＝^・^＝

ピンクウ

サピヨン

『ぐしゅ』

思わず渡された予告状を曆は握りつぶしていた。

「せ・・・先輩？どうしたんっすか？」

クロウは恐る恐る曆に尋ねる。

「クロウ君私はクロウ君のこと馬鹿だ馬鹿だと今までも散々言ってきたが・・・ここまでとは・・・貴重なカツプ麵を食べる時間すら削って君の話の聞いているというのに・・・。」

曆の手紙を握りつぶす手がプルプル震えている。心なしかメガネの奥の瞳も座っているような気がする。

「もうてめえー舐めんのもいい加減にしろよ！？なんだよこのふざけた予告状は！ピンクウサピヨンっただれだよ！？既に銀狼さんですらないじゃねえかよ！？いままでは我慢したけど、さすがにこれはないだろ！？ギャル文字だよ？ギャル文字！！ハートを頂いちゃうってどこの恋愛マスターだよ！？予告状が届いたら何でもかんでも対応すればいいってもんじゃねえだろ！てめえも一応プロだろ！

？すこしは吟味しろよ！？馬鹿なの？死ぬの？カップ麺に謝れよ！
！！！ゼハアゼハア・・・」

怒りのあまり一気にまくし立てたため酸欠状態にまでなってしまう。前かがみになり両手を久の上に乗せて息を整えている。

「せ・・・先輩・・・キャラが・・・キャラがおかしくなってるっす。女の子がそんな言葉使いしちゃだめっすよ。そしてカッププラーメンは関係ないような・・・」

「ああ？」

顔だけを上に受けて暦がクロウを睨みつける。

「な・・・なんでもないっす・・・」

さすがに暦がキャラを崩してまで激怒したこともあり、若干ながらこの後からはクロウも予告状の吟味を始めるのであった。

聖母の微笑み 後

0月9日 AMO:00

「奴だ！！！奴が現れたぞお！！！！」

「あそこを照らせ！！！！急げ！！！！」

男たちの怒声が飛び交う。

空がいくつものサーチライトで照らされている。そのサーチライトの一つに一瞬『影』が浮かぶ。

『影』は怒声を上げていている者たちをあざ笑うかのように、空を自由自在に『駆ける』。あたかも空を飛んでいるかのように。

その影を見つめる一つの視線。その視線の持ち主は、

「現れたわね！黒狼たん！今日こそは私が捕まえてあげるんだから！！」

「っていうかクロウ君はまだ戻ってこないの？はあ…ほんと使えないんだから…。」

一緒に来ていた相棒の姿が見えないことに思わずため息を漏らす。

「車に忘れ物したからって取りにいったからどれだけ時間がたつてるのよ…これはまたおしおきが必要みたいね。」

曆がふとそんなことを漏らすと、なぜか一瞬『影』の正体であるブラックウルフの動きが空中で止まる。その姿はないか慌てているようにも思える。

「まあそれより今は黒狼たんね。なぜかわからないけど珍しく慌て

てるみたいだし・・・今がチャンス！」
そういうとスーツケースからなにかを取りだす。
それは円柱型の物でなにかトリガーらしきものが取りつけられている。見た目的には『バズーカ』に似ている。それを肩に担ぎ『影』に向けると・・・

「発射あ~~~~。」

円柱のトリガーが引かれる。『ズドオン』という音が辺りを響きなが丸いにかが発射される。
その丸いものはすごい勢いで『影』に近づくと自動的に展開されてネット状の物が辺りに広がる。

「よし！完璧！！そのままいけえ！」

ネット状の物が止まっていた『影』補足したかと思われたその刹那『影』が霧散する。
そしてネット状の物は空を掴みそのまま落下していく。

「え…嘘…逃げられたの？…完全に捕えたと思ったんだけどなあ。あれは反則でしょ…どうなってるのよ…」
曆は信じられない物を見て呆然の立ちすくむ。その顔には驚きという立ちが現れていた。

そして何かを思いついたようにふとつぶやく。

「これはあとでクロウ君でまたストレス解消しなくちゃ…。」

もうその日に白衣の女が『影』を見かける事はなかった。

聖母の微笑み 後（後書き）

ご覧いただきましてありがとうございます。こちらで書き溜めてい
る文はラストとなります。

この小説はもう一つ連載させていたでいてる物の気分転換に合間合
間に書いたものだったので、文字数がなぜか近づいてしまっ
ていました…なんか現代風なものがつい書きたくなって…。

っていうかジャンルは『SF』でよかったですかね？何か違う気
もするけどピンとくるものがありませんでした。ジャンル詐欺にな
っていたらすいません…

あらすじのところにも書かせて頂きましたが、こちらの小説は更新
時期は未定となっております。（ある程度たまったら投稿する予定
です。）

もしタイミングが合いましたらまたご覧いただけますようよろしく
お願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4227ba/>

怪盗黒狼たんと保険女

2012年1月11日06時01分発行